

(別紙2)

論文審査の結果の要旨

氏名 乗松亨平

乗松亨平氏の論文「〈現実〉の条件 — ロシア・リアリズム文学の成立と植民地表象」は、1790～1860年代のロシア文学におけるカフカス（コーカサス）のテーマについて考察し、合わせてこの時期のロシア文学の様式がロマン主義からリアリズムへと変遷していくプロセスを明らかにしようとしたものである。

ロシアでは18世紀末以来、文学作品の中でカフカスが描写される機会が増え、ロシア近代文学の創始者のひとり、アレクサンドル・プーシキンの『カフカスの虜』（1822）はカフカス・ブームを引き起こした。カフカスはその後もさまざまな作品の中に登場し続けるが、その扱われ方には変化が見られた。この変化は文学様式の変遷を反映するものであり、同時に当時の文化的背景とも深く関わっていた。乗松氏の論文はカフカスのテーマをロシアにおける「植民地」の表象という立場から捉え、その分析を通してロシア・リアリズム文学成立の事情を解き明かそうとする、きわめて意欲的な仕事である。

本論文は序論、結論と本論三部から構成されている。まず本論第一部では、「カフカスを見る主体」と「カフカスを知る主体」が形成され、変化していく様子が考察されている。プーシキン、レールモントフ、マルリンスキー等の作品を通して、それらの「主体」が次第に個人的要素を強めていくことが明らかにされている。第二部ではロシア文学のメディア環境が貴族社会から商業的出版へと中心を移動した時期である1830年代に焦点が置かれ、カフカスの社会的理解についてのアイロニーがテキストの中に表出し始めたことが指摘される。第三部は1840年代以後即ちロシア・リアリズム文学の確立期におけるカフカスの描かれ方を考察したものである。前半では批評家ベリンスキーの文学理論、後半ではトルストイの『コサック』（1863）が分析されており、カフカスに対する視点が次第に曖昧化し、同時に作家がそうした変化にどのように対応しているかの考察がなされている。

本論文は関連する先行研究のみならず、ポスト・コロニアル批評を含む各種の文学批評をも踏まえた上での作業であり、研究方法の明快さと論述の客観性は論文の結論に高い信憑性を与えるものである。また乗松氏はカフカスの表象をめぐって文化と文学の間を往来しつつ広い視野で議論を展開しており、この点も評価されるであろう。

審査の過程では、<より広範なテキストを取りあげることによって、ロマン主義文学がカフカスと結びついた経緯をも明らかにすることが可能ではないか>との意見も出された。しかしこの指摘は本論文の本質的な欠点を意味するものではなく、むしろ本論文の意義と乗松氏の今後の研究に対する期待の大きさを示すものであったと言える。以上のような評価に基づき、審査委員会は全員一致で、本論文が博士（文学）の学位に充分値するものであるとの結論に至った。